

## 瀧之坊話考

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 平澤, 一 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2297/23419">http://hdl.handle.net/2297/23419</a>

## 瀧之坊話考

平澤 一

## Über die Erzählung vom Narrendorf Takinobo

Hajime HIRASAWA

近世の社会において、人々は精神遅滞をいかにみ、精神遅滞といかに接していたであろうか。石川県におけるこの問題を解明する目的で、これまでに著者は(1)寛文10年(1670)設置の笠舞の御救小屋に収容・保護された精神遅滞者、(2)精神遅滞の為の開作能力欠如による百姓の嫡子替、(3)近世の諺、(4)能登内浦の福子の伝承につき調査してきた。しかし福子の伝承を除いては、精神遅滞者の存在形態を捉えることはできなかった。ここには、石川県珠洲郡内浦町およびその周辺の地域で語り伝えられている「瀧之坊話」について、問題の解明を続ける。

瀧之坊話は、日本昔話大成の分類によれば、笑話の愚人譚の愚か村話に属する。笑話は人間の愚行を語る滑稽談であり、愚か村話は交通の不便な、山の奥深くの村に結びつけられ、その村人の愚かな行動として語られる。山奥の村人が町の人と接した場合、言葉のとり違い(誤解)、町にあって村にない物の使用法を知らない(蚊帳の吊り方を知らない、うどんを知らず蠟燭と間違える)などによって、町の人を遅れている、愚かであるとみる。愚か村話の多くは都市文化と村落文化との接触によって生じる(関敬吾)。しかし数多くある村の中で、ある一つの村だけが、愚か村とされる理由はなぜかを更に明らかにせねばならない(大島建彦)。笑話は本格昔話のような整然とした構造をもたない。すなわち笑話の構造は基本的には一つのモチーフからなり、話の発端句も結末句も原則的には語られない。関によれば、鹿児島から山形までの二十五の県にわたり、四十近くの村が愚か村と呼ばれている。一村の全員が、みな標

準以下の知能の持主であることは、精神遅滞の出現率から考えても、あり得ない。それにも拘らず、ある村を愚か者扱いするのは、「心ないわざ」(大島建彦)であり、村人にとっては「災難というよりいいようのない不幸」(宮崎一枝)である。しかし愚か村話は、現実の地名や人名をあげると、迫力をまし、あたかも現実であるような錯覚さえ与える。これは、落語で江戸子が近郊の農村の人々の言葉遣いや態度に優越感をもち、見下して露骨に馬鹿にし、田舎者扱いするのと類似の現象である。愚か村話において、町の人が村人を見下し、愚か者扱いする態度から、近世の人々の精神遅滞者に接する態度を類推するのが、この研究の目的である。

## I

訪問調査は、昭和63年の6月・8月・10月および11月に、石川県の珠洲市三崎町引砂、珠洲郡内浦町の瀧之坊・上西・田代・小木、および鳳至郡柳田村寺分で行なった(調査地略図参照)。調査の日時・地区・話者を次表に示した。

日時	地区	氏名	年齢
昭和63・6・17	珠洲市三崎町引砂	森かつえ	
6・18	珠洲郡内浦町宮犬	坂下喜久次	
	行延	馬場 宏	68
8・22	鳳至郡能都町宇出津	山瀬 登	
10・3	珠洲郡内浦町瀧之坊	横山マス	82
		横山泰英	55
		新出栄蔵	75
10・4	珠洲郡内浦町田代	山岸勝次	81
	上西	宮元善治	74
11・5	小木	吉岡一雄	83
		梶本吉郎	69
11・6	鳳至郡柳田村寺分	上野キヨ	85
	珠洲郡内浦町行延	高西ミス	85
	上西	宮元善治	74



瀧之坊話の話者は、内浦町では瀧之坊の横山マス・新出栄蔵、田代の山岸勝次、上西の宮元善治、行延の高西ミスの五氏であった。また柳田村寺分の上野



きよ氏は内浦町国重の出身であり、瀧之坊話は祖父から娘時代に聞いている。浜田舜英・小正正三・中谷清登の三氏は、調査に同道して、話者に著者を紹介して頂いた。

(1) 瀧之坊話の伝承の状態：調査の目的が昔話そのものの研究ではないので、愚か村話のみを聞くことにした。現在、内浦町およびその周辺で語り伝えられている瀧之坊話は、十五話前後である。横山泰英氏（55歳）によれば、瀧之坊でも50歳台の人は「まだ、この話を子供の頃に聞いているが、もうはっきりと覚えていない。60台の人々は、まだよく覚えていて、話すこともできる。私の父（明治36年生れ）や向正一さん（明治40年生れ）は、よく知っていた。今から10年位前には、まだ知っている人が多かった。私らの年配になると、昔ほどこの話は口にはのぼらない。私らの年代を過ぎたら、そんな話は皆無になる。子供達はもう昔話を聞かない。テレビや。今は、せちがらい世の中だから、そんな

話は馬鹿らしいとってしない。また瀧之坊の人は、こんな話をされると、馬鹿にされたような気がして、今はもうそんな話はしないよと、つい言いたくなる。」30台の瀧之坊の人は、子供の時に、もはや瀧之坊話を聞いていないことは、新出栄蔵氏（大正2年生れ、75歳）も語っていた。30歳以下の人、とくに10台の人について、瀧之坊話の伝承度の調査は行なわなかった。愚かな人の住む村ではないのに、愚か村にされてしまった瀧之坊の少年と青年に、この話をきかせて下さいと頼むことに、ためらいを感じたからである。

従って、瀧之坊における話の伝承の状態を明確にすることはできなかったが、ほぼ次のような状況であると思われる。瀧之坊話では、愚か村を近隣の村に転移する傾向が、全く認められない。また、庚神講の夜の伝承などのような村落共同体の管理による伝承もなかったようである。また田畑裏をかこみ話をきく畑伝承は、ほとんど絶えてしまっている。瀧之坊の24軒のうち、田畑裏の残っている家は一軒か二軒であり、孫はもうお祖母さんを相手にしなくなり、専らテレビをみている（横山泰英）。祖父あるいは祖母が孫をねかす為に話を聞かす寝物語伝承の現況については、考察するに必要な資料が不足であるので、判断はできない。瀧之坊の村人の間では、「瀧之坊話」は次第に語られなくなっていく傾向が認められるようである。瀧之坊話は、現在、瀧之坊の村人の中でよりも、周辺の町村の人々の間で語りつがれている。

(2) 伝承者：訪問して聞いた話は、ほとんどが話の筋書きで、話の断片だけのことも少なかった。話の型式で話されたのは上野きよと宮元善次の二氏だけであった。愚か村話は、ただ一つのモチーフだけの短い話であるが、それでも話の筋だけを聞くのと、話として語られるのとは、演劇の筋書きだけを読むのと舞台上演されるのを見る程の違いがあった。

上野きよ氏は、明治36年5月21日生れで、訪問の時は85歳であった。旧姓は大澤で、生家はおもとの珠洲郡木郎村字国重（今は内浦町国重）の山口防災ダムの近くにあった。「私の家は一

軒屋だった。下に一軒と、ほかに新宅があり、大畑四軒とっていました。子供の頃に、兎・狐・雉子はいましたが、猿だけは姿をみたことはなかった。」(今は、その家はない)。「私が話を聞いたオジジ(祖父)は、木郎村字国重の大畑甚右衛門(ジンニヨモン)です。御経もよく覚えており、御詠歌の時なんか、皆さんに御経の説きほどきをしていました。頭のよい人で、一度きくと忘れることがない。また、字もうまい人でした。昔話もよく知っていて、私の10歳位までに、よく話をしてくれました。これが、その覚えの帳面です。(横本の栗表紙の帳面で、表紙に「木郎村国重／大畑甚右衛門／大正三年十月」と三行に墨書してある。)オジジにきいた昔話には、皆、始めは「とんとムカジャあったとい」で、終りは「なんぼみそ、あいてくったら、からかった」でした。話を聞いたのは冬ですわい。夏は外に遊ぶ。冬は囲炉裏に、すわって聞く。「オジジ昔いわしま」というと、「おお、とんと昔あったとい」で始まります。終りには「ムカジャ、むけて、話はげたとい」もありました。オジジは囲炉裏の上(横座)にすわる。それから、孫でも、またトト(父)でも、(オジジの)横にすわる。村に語り手は、ほかにいず、オジジひとりでした。」

祖父の大畑甚右衛門は、百話を語ることができた。きよさんは、そのうち六十話を完全に思いだせる。きよさんには炉辺で伝承したこれらの話をテープに吹きこみ、書き起した二冊の著書「引砂のサンニヨモン」(J.D.C出版部、昭和55年)と「お大師さまと衛門三郎」(J.D.C出版部、昭和59年)とがある。昔話を本にまとめた動機は、77歳になり、これまでのように体が動きにくくなり、仕事を控えるようになると、俄に子供の頃にきいた祖父の話を思い出すことが多くなった為である。訪問の当日、きよさんの小学校時代の同級生高西みす氏(内浦町行延)を伴い、きよさんの甥・小正三氏に案内されて、上野家の玄関に立った。家の中に入ると、廊下は磨きあげてあり、柱には黒漆が塗ってあった。何年かぶりに顔をあわせた二人の級友は、懐しげに小学校時代のことを話しあってい

た。高西みすさんによると、「瀧之坊の子は、男は横山さん、坂谷さん、女は中島さん・川口さん・西海さんがいた。(学校で)男の子は瀧之坊の子供に「瀧之坊ガンチヨはミソガンチヨ」といった。女の子は、そういうことは、言わなかった。瀧之坊の子にも、できる人はいました。横山(義繁)さんは、いつでも一番だった。」

上野さんは、小学校時代を回想して、次のように話した。「私は四年生までは、(不動寺小学校)の国重の分校にいました。五・六年は、不動寺小学校の本校に通いました。本校に通い始めは、慣れるまで、一寸気がはりました。別にヨソモン扱いはされたのではありませんが。」「服は着物でした。着物は木綿の縞物でした。シャツも着ない。よう風邪をひかなんだ。雨の日は菰帽子(コモボン)をかぶった。履物は天気なら草履、雨が降ると草鞋をはいた。雪道は、大きいオソをはいた。これは足の半分は藁があり、キビスはそのまま裸に出ていました。」(小正氏が、傍から、その頃は、皆がそうだったと補足した。)

内浦町上西の宮元善治氏は大正3年1月18日生れで、74歳であった。宮元さんは、昔話の語り手としてよりも、大正と昭和の上西の生活の変化に精通している人という印象を強く受けた。上西の買物は宇出津と飯田が半々、縄モン(縄は綱の材料になる)及び枳モン(米や穀類)と昆布・スルメ・鰯との物物交換は小木と宇出津で行われた。小木と宇出津に上西から歩く道の経路の詳しい話は、叙述の中に景観が浮かんでくるように生彩があった。「明野から小木に下る道で、見おろすと、城ヶ崎から九十九湾までが眼下にみえる。実に感じがいい。天気がいいと、狼煙からモズのハナまで見える。それから快晴の日になると、七尾のセメント会社の煙突の煙がみえる。富山湾に立山がきれいに見える。その翌日——明日か明後日位——には雨になる。朝露のない日も、必ずその日は雨になる」。冬の出稼ぎで埼玉県の川越と輪島の谷川家に、杜氏として出かけたこと、松波川の護岸改修工事、田仕事の年間の手順、田切歌・田植え歌、葉草、観天望気の法など話はずきなかつ

た。最初の訪問で、帰りの汽車の時間の都合で、話を中断して辞去したが、未だ話すことが沢山あるのにと残念そうであった。後に再訪して、心残りなく話を聞きとった。この調査で、同じ人を二度訪ねたのは、宮元さんだけであった。

II

採集した瀧之坊話の話型と採集地点とを表示した。話型の分類は、「日本昔話大成」と「日本昔話通観」第11巻、富山・石川・福井」を併記した。また、既刊の昔話集2冊（「奥能登地方昔話集」, 伝承文芸第8号, 昭和46年。大島広志・常光徹「三右衛門話」, 昭和51年）と、「内浦町史」第2巻・第3巻より直接現地を訪ねて採集できなかった話型を表に追加した。

「瀧之坊話」の話型と採集地

日本昔話大成	日本昔話通観	珠洲郡内浦町							珠州市		鳳至郡	
		瀧之坊	田代	駒渡	上行	松河	秋吉	引砂	是久	柳田村寺分	能都町祖倉	
303 手水を回せ	357 手水をまわせ										+	+
311 娯見所	351 かかみしよう											+
312 飛び込み蚊帳	390 かや知らず	+										
314 芋転がし	327 ものまね失敗	+	+				+		+			+
315 蟹の禪	330 蟹のふんどし					+			+			
322 元結素麺	388 うどん知らず							+				+
324 樫木綿入	414 櫓の綿入れ	+						+				
325 馬立貝	395 さざえの殻	+			+	+						+
	361 人まね失敗							+				
472 石肥三年	419 石肥	+	+		+		+					
	443 塩幸より谷水	+	+				+	+				
	450 瀧之坊がんちょ	+	+		+	+	+					+
	476 マッチ知らず										+	
風呂の湯	をのむ	+		+								

代表的な愚か村話である佐治谷話は、採集が極めて多く、そのタイプは数十を数えることができる（関敬吾）。多数の佐治谷話の中で、発端句「むかしむかし」に類する語句、結末句「めでたしめでたし」を備えることは、極く例外的である（稲田浩二）。瀧之坊話では「奥能登地方昔話集」の五話のみが、発端句と結末句とを備えている。「芋転がし」では、「むかしむかし——それきり、なんばみそ、けんちよけんちよ、おしまい」であり、「瀧之坊がんちょ」では、「むかしは——それべったり、なんばみそ」などである。「奥能登地方昔話集」はすべての話をテープに集録し、伝承状態の良好な話を選

んだので、語り口の調を忠実に再現していると思われる。その他の昔話集の瀧之坊話には、発端と結末の定型句を欠いている。上西の中ロ一郎氏は、瀧之坊話は「とんと昔」で始まる話とは違ふと、著者の問いに答えている。単純な構造の笑い話と世間話には、発端の「むかし、むかし」と、結末の「めでたし、めでたし」は、話の内容にふさわしくないと説く人もある（大島建彦）。また話を聞く相手によって、発端と終りの定型句が語られたり、語られなかったりすることも、あるであろう。子供の聞き手に対しては、すらすらと自然に出る定型句も、昔話の採集者に対して笑話・世間話を話す時には、省

略されるのではないかと推測される。

今回の調査では、瀧之坊話を新出栄蔵・宮元善次・山岸勝次・上野きよ・高西みすの五氏に聞かせて頂いた。新出栄蔵氏（瀧之坊）の七話が最も多く、かやしらず・芋転がし・櫓の綿入れ・さざえの殻・石肥・瀧之坊がんちよ・風呂の湯をのむであった。宮元善次氏（上西）は三話で、さざえの殻・石肥・瀧之坊がんちよであった。山岸勝次氏（田代）は四話で、芋転がし・石肥・イシリより水・瀧之坊がんちよであった。高西みす氏（行延）は三話で、蟹の禪・さざえの殻・イシリより水であった。上野きよ氏は六話で、手水まわせ・かかみしよう・芋転がし・元結素麺・さざえの殻・瀧之坊がんちよであった。但し、上野氏の「手水まわせ」と「かかみしよう」とは瀧之坊の者と特定されていず、何処の誰とも分らぬ愚人譚である。

上野氏の瀧之坊話を聞きながら筆記し終って、ほっとした時、先日、今の話をテープに吹きこんで置いたから、これも役に立つなら持っていきなさいと、テープを手渡された。話の口述筆記とテープの吹き込みとは、微妙な違いがある。

次にテープに集録された四話を対照して掲げることにする。

(1) 「芋の子ころがいた」

A（テープ）昔、私の家から三里ほどの所に瀧之坊村という山村がありました。この瀧之坊の村人たちは、世間知らずの米を作るほか何もわからない人ばかりでした。その中に、ただ一人だけカミナヤじいさんという、発明な——もの知りな——じいさんがおりました。村の人たちは、分らないことがあると、いつもカミナヤじいさんに聞いておりました。ある時、その瀧之坊に葬式があり、皆でよばれに行くことになりました。そこでカミナヤじいさんが、みんなに、葬式の家についたら、オラのする通りにさっし——しなさい——と言うと、みんな一緒に出かけました。さて、その家につき葬式がすんでから、よばれるのに、一番の上座にカミナヤじいさんに座ってもらおうと、皆は御膳につきました。村の人達は、一部始終、カミナヤじ

いさんのすることを見ては、真似をしておりました。やがて、カミナヤじいさんが箸をとり、御飯をいただきだすと、皆も箸をとり、御飯をよばれておりました。そのうちに、カミナヤじいさんが、里芋を箸につまみましたが、すべて下に落してしまいました。それを見ていた村人たちは、やはり、その真似をしななければならないと思い、次から次へと、箸で里芋をつまんで、コロリと下におとしました。これを見ていたカミナヤじいさんは、そんなことまで真似をしなくてもよいと言うことを、言葉にだして言えないものですから、隣の人を肘で突いたそうです。すると、それも、みな真似しななければならないと思うて、次から次、肘で突いて回ったそうです。

B（口述筆記）ある家に葬式があって、皆で行くことになったので、カミナヤじいさまは、その家に行ったら、オレのすることを、しなさいと言われましたら、みんなで、おじいさんの後をついて行きました。そうして葬式がすんでから、よばれるのに、カミナヤじいさんに一番上座についてもろうて、みんなも一緒に座って、御飯をたべにかかると、カミナヤじいさんは、小芋を箸につまんだけど、ころがって落ちたので、それをみな（皆）、真似をせねばならんと思うて、次から次、みんな落したそうです。カミナヤじいさんが、そんなことまで、真似をしなくてもよいと、いうて口に言われないものやから、傍（わき）の人の肘をついたそうです。そうしたら、次から次へ、肘をついて回ったそうです。

(2) 「灯明とそうめん」

A（テープ）昔、瀧之坊のある村人たちが、親類の四十九日に、よばれにきました。そこで、そうめんの伸ばしたのを、たべさせてもらったのですが、おいしさの余り、腹一杯たべて帰り、そのことを家の者に話すと、それやったら、早速町に出かけて、それを買ってきてまいかあと、いうことになりました。ところが、それが、そうめんと言うものであることを、知らないものですから、その村人は考えて、四十九日に、よばれて食べたものだから、四十九日を

売ってくれえと町の人に言いました。町の人  
は、四十九日とは、なんのことやら分らず、そ  
の村の人は、白い細いものやと答えました。す  
ると町人は、ああ、それやったら分った。ト  
オシミ（灯芯）、トオシミの白い芯のことやね  
え、と言うて、灯芯を売ってくれました。それ  
を沢山買って帰り、ゆでましたが、いくらゆで  
ても、やわらかく、なりませんでした。それで  
も、皆で、この前の四十九日は、やわらかく  
て、うまかったけれど、今日の四十九日は、え  
らい堅いねえと言いながら、その灯明の芯をた  
べたといひます。

B（口述筆記）瀧之坊の人が、年忌があ  
って、よそに行った。そこで、そうめんをよば  
れた。それが、おいしかったので、それをうち  
（家）の者に言った。それを町に行き買って  
時、そうめんの名を忘れた。「四十九日を買  
てくれ」と言った。町人は、四十九日が分ら  
ん。「どんながや。」「白い細長いものや。」「ほん  
ならトウソン（灯芯）やわい」と言ひ、トウ  
ソン（灯芯）を沢山売ってくれた。それを買  
うてきて、うち（家）へ来て、それをゆで、な  
かなか、やわらかならんが、それをたべた  
です。そうしたら、「この間の四十九日はう  
まかったが、今度の四十九日は、こわい  
がやれども、まあ、どうしようもない  
けど、よばれまいか」と言ひ、食べた  
そうです。

### (3)「畑の中の鳥賊」

A（テープ）昔、今のように出稼ぎとい  
うものが、なかったの、家の中で縄をぬ  
うたり、草鞋を作ったり、また町へ小便  
を、かつぎに出かけたりして、いたもの  
でした。瀧之坊の村人が、町に小便を  
かつぎに行った時のこと、町の人から  
鳥賊をもらったそうです。その時、町  
の人が、その村人に、家に持って帰  
って、作ってたべさしいと言ひた  
そうです。そこで、その村人は作  
ってたべ、ということやから、畑  
に行き、持って行きて、土の中に埋  
めておき、二十日位たってから、畑  
にいき、掘り返してみましたが、それ  
には、蛆虫が、むらがってお  
りましたが、それを見た村人は、「なる  
ほど、作ってたべ、と言われた通り、  
いや、いい案配に、

あまた——沢山に——なっておると  
言ひ、喜んでおったそうな。

B（口述筆記）瀧之坊の人は、町へ  
ションベンかつぎ（コヤシを取り）に  
行きましたら、その家の人が鳥賊を  
くれて、これを家へ持って帰って、  
作ってたべさしいと言ひた。そう  
したら、それを家（うち）に持  
てきて、作ってたべて、と言  
われたがやさかい、畑へ持  
ていって、土の中へ入れて  
おいて、それから二十日  
ほどたってから、畑へ  
行ってみましたが、それ  
に蛆がたかって、ム  
ジャムジャしとった。そう  
したら、作ってたべて  
というたら、やっぱり、  
あまた（数多）にな  
ったて喜んでさうです。

### (4)「瀧之坊がんちよ」

A（テープ）それから、また、瀧之坊  
のある家に年忌があって、松波のえ  
らい大きな寺のお坊さまに  
来てもらう時、今のように自動  
車のない時ですから、お坊  
さまを駕籠に乗っていただ  
いたが、駕籠は二人で、か  
つがねばならないからう  
しろの方を、かついだ人  
は、お坊さまに、しりむけ  
（尻向け）にならない  
けど、前の人はお坊  
さまに尻向けになる  
もので、偉いお坊  
さまに尻向けに  
することを、出来  
ないと言ひ、駕籠  
を横にして、両横  
に駕籠を、かつ  
いださうです。そう  
したら、ガン  
チヨは横歩  
きするもの  
ですから、それ  
からは「瀧之坊  
ガンチヨ」とい  
ういみなを  
つけて、私  
たち子供の時、  
瀧之坊の子  
供が学校に  
来ると、「瀧之  
坊のガンチ  
ヨ」と言ひ、  
かまいました  
けど、今は瀧  
之坊の人  
たちは、ど  
んな人にも  
負けない人  
たちばかり  
です。

B（口述筆記）瀧之坊のある家に、  
年忌があって、松波の松岡寺の御  
坊さまがあって、そのお寺のお  
坊さまにきて頂く時や、今  
のように自動車のない時や  
やさかいに、駕籠にお坊  
さまに乗って頂いて、駕籠  
は二人で、かつがねば  
ならないから、後（う  
しろ）を、かついだ人  
は、お坊  
さまに尻向けに  
ならない  
けど、前の方  
の人は、お坊  
さまに尻向け  
になるもの  
で、偉いお坊  
さまを、尻  
向けに  
することは  
できない、  
という  
て駕籠  
を横  
にして、  
両横に  
かつ  
いださ  
うです。  
そう  
したら、  
「瀧之  
坊が  
んち  
よ」と  
い  
うて、  
い  
み  
なを  
つ  
け  
て、私  
たち  
子  
供  
の  
時、  
「瀧  
之  
坊  
が  
ん

ちよ」というて、かまいました。

テープの話は、上野さんの昔話集「引砂のサンニヨモン」とほとんど同じで、恐らく読みながら話をしているのであろうと推測される。それでも息を切る所など、文章と少しずれており、朗読を聞くのと違い、語りかけられている感じがする。説明は緩徐で、話の舞台の土地の生活の説明や方言の解説や行動の動機などが、始めて話を聞く遠い国の人にも分るように、説かれる。これに対して、口述筆記のために対面して聞いた話は、テープ吹き込みの話よりも、やや短くなる傾向があり、いきなり本題に入る。息のつぎ方も自然であり、皆もしている瀧之坊話という暗黙の前提が、語り手と聞き手の間にあるという印象を受けた。「夜囲炉裏をかこみ炉辺談話をしている、皆がもう話の筋は知っているが、耳から聞くと、また面白い、つい昨日の出来事も瀧之坊の話に仮託される」という馬場宏の評語を、上野さんの話をききながら思いました。

「通観」では一話のみで類話のない孤立伝承話も類話を採集した。その中から、次に掲げる。

(5)「石肥」(新出栄蔵氏)

瀧之坊は、昔は馬鹿な者ばかりいた。ウチの田圃の石はウンコこくから、田の出来がよいとカミナヤじいさまがいうと、夜のうちに、村の者が、じいさまの田の石をとって、持って行ってしまった。

(6)「イシリより谷水」(山岸勝次氏)

瀧之坊の者は、「綱のこ」をのうてや、宇出津にかついで行く。戻りには、イシリ(魚醤油で醤油のかわりに使う)を買ってきた。あれわね、不動寺のあたりだろう。そのイシリが手についたのに、水を汲んで飲んだ。その水がイシリよりうまかったから、イシリをあけて、水を汲んで帰ったんやろ。

(7a)「瀧之坊がんちよ」(新出栄蔵氏)

瀧之坊の者は、どこに行ってもガンといわれた。空を飛んでいくのがガン——雁です。雁は一羽鳥でいくことは一度もない。カミナヤじいさまは——部落の一人者ですね——必ず人をさそって、今日は寺参りなどいって、松波にいっ

た。瀧之坊の者は、みな一緒にいくから、ガン——雁——といわれたのです。(暫く話が途切れる。)

川原の中に入る蟹をガンという。「瀧之坊のミソガン」と、不動寺の学校の四年を出て、松波小学校の五・六年にかよると、上村——本当はただの「上」だが上村といていた——の子供が言った。上村の子供は、瀧之坊の子供をみつけると、「ミソガン、ミソガン」とかまった。恐ろして、サーッと逃げた。その頃、瀧之坊から6・7人かよう者がおったが、学校がすむとバラバラに帰った。そうすると、上の子供にかまわれて、恐ろしくてサーッと逃げた。石もぶつけりゃ、棒を持って追ってきた。本当の喧嘩でないから、こちらが逃げりゃ、追ってこなかった。(話題が変わり、昔話の口調になる。)松岡寺の門主は六人づれで、こちらから迎えにいった。二人が駕籠をかつぎ、二人が控えて、きれいな椅子を二人が持つ。瀧之坊ガンチヨで、御前様に尻をむけるのは失礼やと、横に歩いたというのは、ウソです。道が狭いので(改修以前の道の狭さを詳述する)、足もとが見えない。それで、少し斜めになって歩いた。それをガンチヨといて、はやすのです。

それで葬式や法事に、とまりがけで、おいでた御前の風呂の水を競争して呑んだ。他の部落では、この話は残っていない。上の子は、瀧之坊の子を、「御前様の湯を呑んだ、きたない」とかまった。

(7b)(宮元善次氏)松岡寺の御前様を駕籠で送り迎えた。尻を向わせるとイカンというので、横になってかつぐ。そういうふうなので、瀧之坊ガンチヨといった。

ミソガンというのは、「泣きみそのガン」のことです。蟹の甲羅が変わるとやらかい。泣きミノの奴がいる。すぐ、いじめられて泣くのを、「ミソガン」といったものです。

一年生からオレは松波小学校で、六年までかよった。瀧之坊は、もとは不動寺小学校にいったが、大正13年に駒渡に松波小学校の分校ができた。それから、五年生になると、瀧之坊の人は、ここ(上)を通過して松波小学校にかよった。

俺も、やっぱり「ガンチヨ」といった。瀧之坊の子は転校生だから、尻をこそげていた。

(7c) (山岸勝次氏) 私は馬渡小学校の六年を出て、松波の尋常高等小学校にかよった。ここ(田代)から高等小学校に行く者は、二人しかなかった。松波の学校では、「瀧之坊ガンチヨ、横ばいに、ほうてこい」と皆いった。松岡寺の坊様は、俺が二十まで、葬式に行く時は、駕篁だった。坊様に背を向けたらいかんと、瀧之坊の者は横歩きした。ソナコトハ、ナカロウガネ。俺も駕篁かつぎに出たことがある。駕篁かつぎ人足は、五人いった。駕篁をかつぎには、一番達者なものがいった。二人でかつぎ、二人が交替、一人が椅子をかついだ。駕篁人足は威張ったもので、葬式でも、駕篁人足が帰ってくるまで、酒も呑めなかった。もし帰らぬ先に、酒でも始まっていると、俺達の勤め、どう思っていると、荒れたものです。病人が出た時も、ウチの村から宇出津か柳田にかついで行った。真っ直ぐにかかえ、ヨッシヨ・ヨッシヨと走らねばならない。とても斜めに走れたものではない。(瀧之坊の狭かった道について) 昔の瀧之坊の道は狭かった。巾は2メートルはあったが、歩く所は、巾1メートル位だった。馬がくると、恐しくて、体をよけた。橋も一本だった。松波にいったら(往復)、一日一足、草鞋を破ったものだ。一度だけ雪で上村まで帰ってきたが、それから先、帰れなくなり、先生の家に一晩とめてもらったことがある。

(学校の中でのガンチヨについて) 大正12年8月に高等科を卒業した。その時、瀧之坊からは、大平と西海が来ていた。大平はきかぬ気の者で、松波の学校でも、「ガンチヨ」と呼ばれると、きかずに向っていった。西海は、よくできた。俺は瀧之坊の者のように、いじめられたりしなかった。体が大きいこともあったろう。また、家が遠くて——松波まで二里あるが、少し走ると一時間少しでいけた——放課になるとすぐ帰ったので、いじめの相手にならなかったのだろう。

### Ⅲ

瀧之坊話は、瀧之坊の土地につながる世間話

で、愚か村話の特徴が強く出ている。瀧之坊は石川県珠洲郡内浦町に属し、松波川の上流にある。松波より歩いて約一時間の所にある。松波より上西までの約30分間は平野の中の平坦の道を行くが、ここより山の谷間を歩くような道になる。農林業を主とする集落で、山林が多く、それに比べると田はやや少ない。昭和59年には26軒あったのが、昭和63年には24軒になっている。兼業農家が多くなり、若い人は土木や運転などの仕事をする人が多いと聞いた。戦後農道が出来、耕地整理が完了するまでは、道が狭くて農家でも荷車を使えず、傾斜地に階段状に棚田がある辺鄙な所であったという。横山泰英氏は「ここは特別辺鄙な所だった、それが瀧之坊話の原因だ」と語っている。雨が降り続けると、福光・駒渡・泉開拓の支流の水が瀧之坊に集まる。また下流の上村では、改修以前は川幅が狭くて氾濫した。従って水が出ると、瀧之坊は上からも下からも水が溢れる。田代も駒渡も、瀧之坊に近いのに、珠洲見街道(内浦町と珠洲市の間の山の瀬の道)を通り松波に出た。瀧之坊は近いにも拘らず、田代・駒渡の人々にとって縁の遠い所であったそうである(山岸勝次)。

ある村の人々が、全員揃って愚かであるなどということは、経験上、到底あり得ない。それでは、どうして愚か村話が生じるのか。

その成立の条件として、(1)近世社会における町と村との経済生活の較差、(2)この較差に基づく町の者の村人に対する優越感、(3)近世農村における近隣の村に対する対抗意識などが考えられる。

瀧之坊話のうち「大成」の分類で302から325(表Ⅱ)までは、全国のどの愚か村にも共通する話であり、いずれも近世における町と村との経済生活の格差から生じた(i)町と村との異なる慣習・作法、(ii)町にあって村にはない物の名称や使用法が主題となる話である。「芋転がし」は(i)であり、「飛び込み蚊帳」・「蟹の禪」・「元結素麺」・「櫓の綿入れ」・「さぎえの殻」・「嬬見所」は(ii)である。別の観点からは、「嬬見所」と「飛び込み蚊帳」は、村の衆の町見物、「手水をまわせ」は役人の村訪問と見

ることもできる。素麺あるいは「うどん」を蠟燭の芯と間違える村人の話を、仮に江戸時代末期の都市と農村とに設定してみると、事実あり得る一面もあり、また見え透いた虚構の一面もある。江戸時代末期には、都市では蠟燭はかなり広く用いられたが、多くは儀式・酒宴・外出に限られた。地方の農山村で蠟燭が行き渡るのは、明治になってからである。村人が蠟燭を知らないのはうなずけるが、山村の主食の一つであり、仮にソバ切りは初めて見るにしても、救荒食品でもあるソバを知らないことがあるであろうか。「愚か村話」の地名・人名は仮託であり、話を面白くするための誇張と作為が加えられることを、警戒して置く必要がある。

一方、十五・六話の瀧之坊話のうちに、海産物（いか・さざえ）とその加工物（イシリ）を知らないことから、浜の者と瀧之坊の村人との間に展開される話が、約三分の一ある。これらは小木・宇出津・真脇と瀧之坊との間の藁縄・米と金肥との物物交換の経済を土台にした話である。

「443塩幸より谷水」の塩幸は、イシリである。イシリは「冬から春にかけて、スルメイカの内臓に3割程度の塩を混ぜ、七・八ヶ月間熟成させて作る魚醬の一種」（内浦町Ⅱ，845-846頁）で塩幸ではない。現在では内浦町的小木で作られており、醤油のかわりに愛用されている。瀧之坊の村人は、網や綱や草履などの藁物（ワラモン）あるいは米や穀物などの榊物（マスモン）をセナガチにかついで、小木あるいは宇出津に行き、魚やイシリなどと交換をしていた。

小木から帰るにしても、宇出津から帰るにしても長い坂を越えねばならず、汗をかいた体を途中で休める必要があった。どこで休息するかについては、笑話が事実の話あるいは、内容の固定した伝説ではないために、一定せず、たえず変化する。吹上のあみせの坂（内浦町史Ⅱ，977頁）、宇出津の帰り道の長坂（奥能登地方昔話集，83頁）、不動寺のあたり（山岸勝次）などとなっている。この話に迫真の効果を与えるのは、イシリを運搬するイシリ樽で、高さ42cm、上部の長径29cm、短径20cmの樽（内浦町史Ⅱ，

845頁の写真）を一杯に長い坂道を担げば、休む時に思わず水がほしくなるであろう。そこから、イシリより水がうまい話がうまれてくる。

瀧之坊話の中核となり、この話の伝承圏の中に住む人々にとって「瀧之坊話」のキー・ワードになっているのは、「瀧之坊がんちよ」である。馬場宏によれば、ガンは蟹であり、チヨは小さいものを指す愛称添加語である。ガンチヨあるいはミソガンは川蟹である。蟹の横ばいの連想から、駕籠を横にかつぐ話がうまれる。なぜ瀧之坊の人がガンチヨなのかについては、調査に当たって機会を捉えては質問をしたが、遂に宿疑を氷解することはできなかった。一方からいえば、この話の伝承圏の人々にとっては、説明を要しない自明の事なのであったかもしれない。ガンチヨには、単に川蟹だけでなく、少し見下げる意味がある。瀧之坊の学童の小学校は、明治9年から大正13年までの不動寺小学校においても、それ以後大正13年から昭和44年まで、1年から4年は駒渡分校に通学し、5年と6年は松波の本校にかよった当時においても、「ガンチヨ」と呼ばれる経験をしている。なお、瀧之坊の新出栄蔵氏は、ガンチヨは蟹でなく、空をとぶ雁である。瀧之坊の村人は、昔は一人で町に出ることはなかった。これが群をなして飛ぶ雁と似ているのでガンと呼ばれた理由であると話した。この説は新出氏以外からは語られなかったが、町の生活になれない村人が、単独では町に出かけず、つれだって町に出た事の説明として興味があるので、記録に残しておく。

次に「石肥」の主人公のカミナヤじいさまは、「芋転がし」・「さざえの殻」にも登場する。村一番のハツメイな人である。カミナヤはカミノヤ（上ノ屋）であるが、いろいろ調べたが、実在した人物と同定することはできなかった。笑話中の人物で、もともと仮構の人であると考えられる。村の外の話「芋転がし」では愚人譚中の人物であるカミナヤじいさまは、村の中の話「石肥」と「サザエの殻」では滑稽者・巧智者の役割りを演じている。これは、採集量の多い佐治谷話や三右衛門話に起る愚か村話の

二重構造を予感させるものであるが、瀧之坊話では、これ以上の展開は起らない。

近世の農村では村内での連帯・協調を重視するが、村境より外は世間であり、他村とくに近隣の村に対しては対抗意識が強く、しばしば反発しがちであった。内浦町においても、この傾向は明らかである。臨海集落たとえば、小木では浜の者（もん）と在郷の者（もん）が対比して説かれる。在郷の者とは、海岸に臨む小木町の背後の山を越えた奥の村に住む人々である。旧木郎村の字である行延と瀧之坊を「雪の坊・瀧之坊」と呼ぶ語呂合わせもある。海に近く住む者は発明であり、海岸より離れた奥地に住む者は愚かであるという通念である。ところが内浦町の内陸部に入っても、上西と瀧之坊とは松波川の流域にある隣村であるのに、下流の上西では上流の瀧之坊を奥地にあるという理由で在郷の者とみることがある。他村とくに隣村に対する対抗意識は僅かの違いにも優越を感じて、見下すことを可能にする。近世における愚か村話は、上述した諸条件により成立した。健常者の精神遅滞者に対する見下す態度・優越感も、これと類似の性質のものであったと推測される。ある村が、周囲の町あるいは村から愚か村であるとみられる時、次の三つの対応の仕方がある。(1)自村より更に奥地の村に愚か村を「転嫁」する。(2)愚か村の転嫁が遂にもっとも奥深い山村に達し、もはや転嫁する村がなくなると、しばしば愚か村話を巧智者・狡猾者の話に仕立てて、村外の者を欺くために、わざと愚か者を装っていると「やり返す」現象が起こる。愚か村話の採集量の多い地域には、この現象が観察されている。(3)採集量の少ない場合には、やり返しは起こらない。愚か村にされた村人が、愚か村話を語る場合には、愚かでもないのに、世間では愚か村にされているという当惑や弁明を伴う傾向が認められる。採集量の多い佐治谷話と採集量の少ない下田原話について、三つの対応の仕方を検討してみよう。佐治谷話は広く鳥取県に分布し、岡山・広島二県にも及んでいる。佐治谷話の分布圏のほぼ中央に、鳥取県八頭郡佐治村がある。佐治谷話は佐治村に伝承

される話と、その周辺の話の二群にわけられる。佐治村の伝承では、佐治の者を愚か者とみる相手は、武士あるいは佐治谷の出口の用瀬の町の人である。佐治谷の周辺伝承では、相手はどこにすむか明示されないことが多い。佐治谷の愚か村話は、田舎裏をかこんでいく家族伝承と、庚申講の夜に村の大年寄りの家に集まってきた村落伝承とがあり、後者は大正年間まで続いたといわれる。佐治村の話は、周辺地域に比べて、狡猾者譚とおどけ者話が著しく多く、結末には「知れえでのうて、わざとダラズになる」(ダラズは愚かな・横着なの意味)がある。これには佐治者を愚か者と見下す世間の人の愚かさを、逆に笑い・批判する村人の抵抗が含まれている。たとえば、「手水をまわせ」では、手を洗う水をもつて来ず、長い頭の人を連れてきて、頭をグルグルとまわさせ、年貢とりたての殿様あるいは配下の武士に、何も分からぬ愚か者を演じ、年貢の取り立てを断念させる。この結末句は、共同体としての村の管理である庚申伝承には必ずあるが(稲田浩三)、家族伝承ではその有無は明らかでない。また広い佐治谷話の分布圏の所々に散在する、採集量の極めて少ない愚か村話は、自村の愚か村話を佐治谷にたらい廻しにしていた転嫁のあったことを示すものであろう。

採集量の少ない愚か村話として、下田原話をあげる。下田原話は、白山の山麓の手取川流域にある石川県石川郡の鳥越・吉野谷・尾口および白峰の四村に伝承されている。採集量は、下田原話の本拠の白峰村でも十八話(十一話型)である。白峰村には桑島・白峰・下田原の三つの大字がある。下田原話には、二つの類型がある。主役の愚か者が白峰と桑島の者である話は、京と大阪が話の舞台である。京・大阪と白峰村とのかかわりは、村からの冬の出稼ぎと越前勝山の商人の繭・生糸・晒布の出荷によって生じる。一方主役が下田原の者となる話では、相手は白峰・桑島・吉野谷あるいは小松・金沢の者である。これは前の話型で愚か村となった白峰・桑島の者が更に奥地にある下田原に愚か村を転嫁したと考えられる。下田原は、白峰村

の他の二大字である白峰・桑島より奥深くにあり、険しい山道をこえて行かねばならない。現在は定住する人はないといわれる。白峰と桑島の人は、下田原の人は服装が古い、言葉に独特のアクセントがあるなどの理由で、生業はそれほど変わらぬのに、軽くみ、優越を感じていた一面はあったようである。下田原話では「やり返し」がはっきりと認められる話はなかった。

### 結論

奥能登の山村における「愚か村話」を調査して、その結果を報告した。愚か村の村人は、決して愚かなのではないが、町と村の生活の接触が起ると愚か村に仕立てられることがある。その際、村人は「他村への転稼」あるいは「やり返し」によって対応する。この二つ対応が起らない場合には、その村人が話す時に、当惑と弁明を伴う傾向がある。

訪問調査を援助して頂いた浜田舜英・小正正三・中谷清登・山下正昭の諸氏、および御話を聞かせて下さった上野きよ・宮元善次の二氏に厚く感謝します。

### 文献

- 石毛直道：民衆の食事。日本民俗学大系。10, 111—180。小学館，昭和60
- 稲田浩二：愚か村話。口承文芸。116—135，有精堂，昭和53
- 稲田浩二：昔話は生きている。三省堂。1977
- 稲田浩二・小沢俊夫：日本昔話通観。第11巻。同朋社，1981
- 上野きよ：引砂のサンニヨモン。JDC，昭和55
- 上野きよ：お大師さまと衛門三郎。JDC，昭和59
- 内浦町史。第2巻。近世・近現代・民俗。昭和57
- 内浦町史。第3巻。通史・集落編。昭和59
- 大島建彦：咄の伝承。岩崎美術社，1970
- 大島建彦：笑話。昔話研究入門。41—63。三弥井書店，昭和56
- 大島広志・常光徹：三右衛門話。櫻楓社，昭和51
- 奥能登地方昔話集（伝承文芸，第八号）：国学院大学民俗民文学研究会。昭和46
- 小倉学：石川県の昔話概観。昔話。5, 143—163。1976
- 小倉学：白山麓昔話集。岩崎美術社，1974
- 白峰村史。下巻。昭和34
- 西郊民俗。25。世間話特輯号，昭和38
- 関敬吾：日本昔話大成。第8巻，笑話1。角川書店，昭和54
- 関敬吾：昔話と笑話。岩崎美術社，1968
- 関敬吾：関敬吾著作集1。昔話の社会性。同朋社，昭和55
- 関敬吾：関敬吾著作集5。昔話の構造。同朋社，昭和56
- 武田正：笑話の生成・系譜についての一試論。昔話世界の成立。184—198。三弥井書店，1979
- 常光徹：三右衛門話考。昔話伝説研究。第5号
- 中田千畝：きっちよむ話・和尚と小僧。未来社，1975
- 野村純一編：昔話の語り手。法政大学出版局，1983
- 野村純一：昔話伝承の研究。同朋社，1984
- 服藤弘司：加賀藩百姓相統法。金沢法学。3, 1—78，191—231，昭和32—33
- 馬場宏：私の聞いた昔話。第一集瀧之坊話。木郎研究。7, 3—5，1954
- 馬場宏：能登の方言。第2集。昭和54
- 平澤一：加賀藩村方文書における心身障害者。日本特殊教育学会第12回大会発表論文集。414—415。山梨大学，1974
- 松本厚三：加賀山麓・下田原話考。昔話。13, 50—72。昭和59  
同：日本の愚か村話——その特質をめぐって。福田晃編，昔話の形態。380—400。名著出版，昭和59
- 宮崎一枝：国東半島の昔話・三弥井書店，昭和44
- 森浩一編：日本民族文化大系14。技術と民族（下巻）——都市・町・村の生活技術誌。小学館，昭和61
- 柳田国男：世間話の研究。定本柳田国男集。7, 383—397。筑摩書房，昭和43